人形遣ひが臺詞を言うた時代

――「人形」は魚の如く、しゞまであると思つた概念の訂正――

「操」における人形と淨るりとに就いて、今後爲すべき仕事――爲さねばならぬ仕事が、實は多きに失する程ある。就中淨るりの個々の曲風をハツキリとさせておいて、太夫が語る時に前受を狙つて本來の曲風を崩してかゝるのを出來得るだけ防止するのも、仕事の一つだ。言葉を換へると、聽くものが、個々の淨るりの曲風を悉知し、マヤカシ語りの前受、俗風に惑はされない準備――即ち「耳」の養成である。或は人形の科（シグサ）の整理、演出の不合理の訂正なども仕事の一つに數へねばならぬ。

私は、その準備の一つとして人形演出上における二三の問題について、こゝに述べようと考へて筆を執りかけたが、それよりも、本年に入つて、元旦讀書始めに、私が偶然に心付いた二つの事實を、こゝに報告しておきたい。

その一つは、歌舞伎のチョボの權輿に關しての發見。

その二は、人形遣ひが、堂々舞臺でセリフを言つてゐる正本を發見した事を述べたい。

（一）　のチョボの始りは、從來は正德四年二月九日初日の大阪嵐芝居の『天神記』からであると傳へられてゐた。即ちこの『天神記』を、筑後の操から歌舞伎に移して、喜世竹千太夫、三味線村井藤七で、「筑後正本の通狂言に仕候」と、番付に唄つてあるところから、これをチョボの嚆

矢となつてゐた。然るところ、少し遡つて寶永五年秋、大阪岩井座の『待夜の小室節』を『丹波與作』として上演した時にも、「筑後正本の通り」とある番付が發見せられてゐるから、これがチョボの始めだと訂正されてゐるのが、今日までの通説である。然るところ、豈計らんや。舊冬私が手に入れた天和三年三月と刊記のある

うかれきやうげん　『金岡長者之沙汰』　三番續

といふ「狂言記」によふと、說經節を、正に、女主人公がクドキの場合に劇場音樂として立派に使用してゐる。これ卽ちチョボの權輿でなくて何ぞやと言ひたい。從來考へられてゐたよりも、貞享、元祿と二代を遡つた天和三年の、これが文獻である。

この「うかれきようげん」の五卷を通讀して、私は、きのおまで、チョボの始は寶永だ、正德だと爭つてゐた昔がをかしい位ゐに思はれてならぬから、今後私は、まだもつと遡つて起源が發見されないとは斷言出來ないが、恐らくこの天和三年を早いところだと斷じてもさう誤りではないやうである。この「うかれきやうげん」がチョボの權輿を、私に敎へてくれたと同時に、その形式が全く、後世の脚本の體裁をなした、最も早いものだと考へてもいゝ、重大な形式を示してゐるから、私はこの紹介を、別項において書いておいたから、詳しい事はソレを參照されたい。

（二）の場合は、この小文の標題に掲げた如く、私どもは、今日まで「操」形式において、辭、事件の推移、葛藤は淨るり語りである太夫が、「語るべき」ものであつて、三味線は、その太夫の語り足らざる處を補充するが、それは詞、言語でなく糸の音色で、音樂的に太夫を助け、人形は徹頭徹尾、動作を司り、人形使ひ（役者と古來言つてる）は魚の如く無言であるべきものだと考へてゐた。（太夫と人形遣ひが、分業とならざる以前は別である。）然るところ、幕末の頃に、人形遣ひが、人形の動作と共に一二の臺詞を口にする例が出來た。それは、今日に殘る語り物では『義經千本櫻』の三段目鮓屋の段では、權太を使つてゐる人形遣ひが、床の太夫が時政の詞として、「コラ權太」といふに答へて、「何んだ」と言つてゐる。或は『菅原』の佐太村で、三ツ兒の女房達が來るところで、白太夫の人形遣ひが「來た〳〵嬶かアども……」などゝ辭を口にするのが、例のやうにもなつてゐた。今日の吉田榮三が、權太、白太夫を遣ふをりには、魚の如くしじまであるが、ついこの程死んだ吉田文三の如きは、御靈の文樂座で如上の臺詞を言つてゐた。

元來人形は、昔からセリフを口にすべきものでない――口にした例などが古くあるべき道理がないといふのが、私どもの建前で、この幕末以來の人形のセリフを極力排斥してゐたのである。

ところが、私は、人形を知るには、山本飛驒掾を十分に知らねばならぬといふ從來の主張を擴

充して、飛驒と共に、京の山本角太夫、宇治加賀掾の淨るりを知らないでは、當流淨るりの人形の發達は知れないと考へると共に、この元旦を期して、角太夫、加賀の兩淨るりの再吟味、未讀正本の手の届くかぎりの讀破を期して、元旦の讀初めに選んだのが、

角太夫正本の『大念佛七萬日詣』

の五段組織の古淨るりであつた。この『七萬日詣』は上演年月不詳で、從來とも、餘り知られてゐない古淨るりであつたが、筋立趣向が、怪異で、例の京風のからくり應用の舞臺に、グロ味が夥しく當時の見物の心膽を寒からしめたものがあつたらうと想像を續けつゝ讀んで行くと、驚いた。この『七萬日詣』の正本中に人形遣ひにセリフを言はしてゐる暗示が、ハツキリと記してゐる。當時の淨るりが不完全で、人形の動作を十分に說明する事が出來ず、又人形が未發達のためその動作が、何をしてゐるのかを、看客に呑込ましむるに不十分であつたがために、人形遣ひをして、人形の動作を說明する臺詞を言はしめたのであらうが、人形遣ひが、臺詞を言ふト書を、淨るり正本に發見して、私は驚いたのである。そして「人形は魚の如くしじまであれ」といふ說は、今日でも訂正する必要を見ないが、「人形は魚の如くしじまであつた」と思つてゐた今日までの概念は訂正せねばならぬこととなつた。

『七萬日詣』の筋は死後妻を迎へる事はないと妻の末期なる夫婦間の誓文に反いて、殿は後妻を迎へる。その新枕の夜に墓から先妻の魂が飛び來り、新妻の頸に喰付いて殺して了ふ。その明くる夜こそそむいた夫を殺しに來ると言葉を殘して魂は墓へ歸る。殿は時の高僧に、己が命を完うする道を問ふと、僧は、「あじくはんぼうのさう」といふ傳說に從へといふ。その方法は、亡き妻の塚を掘つて執着深き屍體と一夜を共にして、殿も死んだ事に假托すると、或は命を取とめ、執着深き屍體は成佛するだらうとて、この「あじくはんぼうの說」を實行するところで、淨るりには

（入棺）　（淨穢）　（葬ひ）
にうくはんじやうゑのとむらひはいとものすごくぞ　三重

此あひだにんぎやうつかを
ほるしよさせりふあり　きこへけりそも〳〵……

となつてゐる。卽ち「人形、塚を掘る所作、臺詞あり」と說明してゐるのだから、人形遣ひの臺詞が人形の所作に伴うてゐるわけである。

未發達の古淨るりの昔に、「人形の辭」があつた事が、これで知られる。

（昭和七、一、一四）